

G.hyptiacanthum と G.leeatum

2008.6.25

島田 孝

日本で **G.hyptiacanthum** (和名 ; 雪冠玉) や **G.leeatum** (和名 ; 夕薫丸) として流通している種は、現在の分類ではウルグアイやブラジルに生息する **G.uruguayense** 集合体(Agg.)に属します。本



写真 1 : **G.uruguayense** 集合体の
G.hyptiacanthum U51 Uhlig Plant
筆者栽培・撮影

来の原学術記載された **G.hyptiacanthum** と **G.leeatum** は、アルゼンチン南東部に産出する種であり、種子グループが全く異なる別系統の種に属します。

Backeberg 氏が Cactaceae Band III 1959 で **G.uruguayense** (Ar.) Br. & R.、**G.artigas** Hert.、**G.hyptiacanthum** (Lem.) Bt.& R.、**G.leeatum** (Hook) Br. & R.、**G.leeatum** v. **brevispinum** Backbg.、**G.leeatum** v. **netrelianum** (Monv.) Backbg.、**G.guerkeanum** (Heese) Br. & R.を紹介しましたが、これらの種はすべて、上述したように **G.uruguayense** 集合体 (Agg.)に属します。大別して、刺の太い **G.uruguayense** (和名 ; 聖姿玉、元刺玉) と刺の細い **G.netrelianum**(和名 ; 稚竜玉、稚竜丸)、**G.leeatum** (和名 ; 夕薫丸)、**G.hyptiacanthum** (和名 ; 雪冠玉) と呼ばれるタイプに分かれます。この種の専門家である Hofacker 氏らによると、これらの種

は、変異が大きく区別が困難であり、すべて **G.uruguayense** 集合体(Agg.)と呼ぶのが適切であるとされています。

W.Papsh 氏によると、1907 年に Schelles 氏により、上記の **G.hyptiacanthum** の原産地に関する指摘があり、初めてウルグアイ産であるとされたそうです。これにより、より上品で、より胴体に隣接し、より赤い刺の外観を持つウルグアイ産の植物個体を **G.hyptiacanthum** とする見解が導かれたとしています。W.Papsh 氏は、その記載は、**G.netrelianum**(=**G.leeatum** v. **netrelianum**)に該当するとしています。W.Papsh 氏のように **G.uruguayense** 集合体の中で、刺の細いものを **G.netrelianum**(=**G.hyptiacanthum**)、または **G.uruguayense** v. **netrelianum** として区別する人もいます。



写真 2 : **G.uruguayense** 集合体の **G.leeatum**
谷山宰氏 栽培・撮影.

1. ウルグアイ・ブラジル産の **G.hyptiacanthum** (和名；雪冠玉)、**G.leepanum** (和名；夕薫丸)

Backeberg 氏は、不可解ながら、Cactaceae Band III 1959 の中で、**G.leepanum** (Hook) Br. & R. について以下のように記載しています。

……**G.leepanum** (Hook) Br. & R. – The Cact. III : 154. 1922

Echus. leeanus Hook. In Curtis Bot, Mag. 71 : pl. 4184. 1845



写真 3 : 刺の太い Tambores 産の
G.uruguayense (v. Tambores)
Uhlig Plant 筆者栽培・撮影

球形、あるいは押し潰された球形、青っぽい緑色。：コブ隆起は半球、大抵根元では 6 角形。：刺座は楕円形。：刺は約 11 本、細い。：縁刺は幾分曲がっている。胴体に押し付けられている、長さ 12mm。：中刺は 1 本、真っ直ぐ、前へ突き出す。：花は大きい。：萼片は緑色、赤紫の色調が入る。：花卉は蒼白い黄色。：種子は、種子分類で第 (1) グループ – 産地はアルゼンチンとウルグアイ (Britton 氏と Rose 氏の学術記載によると : Herter 氏に基づいてウルグアイ [Saltol])

名前 **G.leepanum**、**G.netrelianum**、**G.hyptiacanthum** は 3 つの独立した種としては問題がある。Hooker 氏の写真 (参照 : 1922 年の The Cact. III : 156 頁、図 164) は長い中刺を見せる植物を示していたから、それゆえ、Britton 氏と Rose 氏は疑いもなく **G.leepanum** を **G.hyptiacanthum** から切り離した。(それに対して Schumann 氏はそれを異名同種とした。)

G.hyptiacanthum に対する Schumann 氏の写真 (1898 年の総合学術記載、403 頁にある図 70) は、それとは逆に中刺のない同じような植物を示していた。これは **G.leepanum v. netrelianum** としてよい。Bozsing 氏によると **G.leepanum** の蕾は赤っぽい、**G.hyptiacanthum** のそれは黄金色である。：ただしそれだけでは種を区分するには十分では無い。これに関しては **G.hyptiacanthum** の項も参照せよ。この花の色に関しては、矛盾した報告がなされている。

正しい決定を困難にしている事は、**G.leepanum** の場合も **G.netrelianum** の場合も中刺が出現したり、欠けたりもする可能性があるためである。(これに関しては、Kreuzinger 氏の 1935 年の “Verzeichnis” 14. の図 217 から 218 を参照せよ) しかし、私の観察した範囲では **G.leepanum** の場合、中刺は大抵存在しうる。“**G.netrelianum** (Monv.) Br. & R.” の場合、時々のみである。

それにも拘らず、私はこれを変種としてのみ、見なすことができた。とりわけ直径 “3cm” の記載は後者の場合、実生苗は合致した。しかし古い個体は合致しなかった。

伊藤芳夫氏の 1957 年の Expl. Diagr. 199 頁にある、**G.leepanum v. roseiflorum** (和名；暁光丸) は交配種であるか、又は **G.uruguayense** もしくは同じ種の 1 形態との混同の様に思える。というのは私が **G.leepanum** に関して輸入した多数の輸入品の中に、一度もバラ色の花を咲かせる植物を見た事がないから。……

ここで、Backeberg 氏が書いた、伊藤氏の **G.leepanum v. roseiflorum** (和名；暁光丸) は、**G.uruguayense v. roseiflorum** (和名；桃姿玉) として現在は認められています、その名前の種子

で実生したものが、黄色の花を咲かす場合が有り、品種レベル程度かも知れません。

Backeberg 氏の記述から約 25 年後に、G.Frank 氏が、Cactus & Succulent Journal (US) Vol. XLVM, 1976 の中で **G.uruguayense** 集合体について以下のように記載しています。

・・・節 I : Uruguayensias Subseries A : Uruguayensia

この節の規準標本種は **G.uruguayense** である。自生地は、その種が着けている名前の国のみを包含する。南の Maldonado から、中央ウルグアイを抜け、北部の Tacuarembó 州と Artigas 州までの巨大な分布地域のために、結局、地方形態の非常に大きな変異性が発達する。



写真 4 : **G.uruguayense v. roseiflorum**
Uhlig Plant 島田寿男氏栽培・撮影

G.uruguayense の名前は別として、**G.leanum**、**G.netrelianum**、**G.artigas**、**G.guerkeanum** の学術記載が存在する。これらの名前は、多かれ少なかれ、厳密な植物学の観点からは、同じ分類学種を指示している。しかしながら、南部と南西部の形態は種として、あるいは、少なくとも立派な変種として、**G.leanum** の名前で受け入れる事が主張されるかもしれない。後者は、その稜が丸いコブ隆起に変貌している、細くて、蜘蛛のような、胴体に押し付けられた黄色い刺と短い、多肉質の、黄緑色の、スリムな花の点で、かなりの一様性を示す。**G.netrelianum** と **G.guerkeanum** は単なる **G.leanum** の異名である。**G.leanum** の名前は優先権がある。中央ウルグアイから、北部ウルグアイまで、頑丈な稜、ごく僅かな太い棘、そして相対的に長い、

大きく開く花を持つ、更に異なった形態を見出す。この **G.uruguayense** の形態は後に学術記載された **G.artigas** と同じで、大抵黄色い花が咲く。しかし、白い花と淡いピンクの花にも遭遇することがある。Arechavaleta 氏の原記載は白い花と述べている。白い花は自生地では、むしろ稀にしか見つからない。この事は、明らかに、彼が、学術描写を、単一の標本に基礎を置いたことを示している。不幸な事にその標本は白花だった。・・・

今から約 30 年前、当時のギムノカリキユームの専門家であった G.Frank 氏は、**G.leanum** (和名 ; 夕薫丸)、**G.netrelianum** (和名 ; 稚竜玉、稚竜丸)、**G.artigas**、**G.guerkeanum** (和名 ; 蒼冠玉) などが、**G.uruguayense** と同じ分類学種であると認識していたようですが、何故か、**G.hyptiacanthum** (和名 ; 雪冠玉) については、触れられていません。南部と南西部の形態である **G.leanum** の名前は、有効かも知れないとしていますが、この種が、刺の細い **G.netrelianum**、**G.leanum**、**G.hyptiacanthum** と



写真 5 : 日本で **G.artigas** として流通している **G.denudatum** (原産地球)
筆者栽培・撮影

呼ばれる **G.uruguayense** 集合体の一連のタイプに相当すると思います。日本で **G.artigas** として流通している種は、Artigas 地区で産出した **G.denudatum** であり、ここで取り上げている **G.artigas**(=**G.uruguayense** v. **artigas**)とは異なる種です。

Backeberg 氏が Cactaceae BandIII 中の記述で、**G.uruguayense** の花卉は明るいライラック色、**G.hyptiacanthum** の花は白、との記述がありますが、Schumann 氏らの過去の記載を述べているだけで、Backeberg 氏も自身が無く、怪しいと考えていたように思います。

G.Frank 氏と同時代のイギリスの E.W.Putnam 氏も、同様な意見ですが、**G.hyptiacanthum** については、次のように書かれています。

……**G.hyptiacanthum** (*Lem.*) *Br. & R.* この小さなウルグアイ産ギムノカリキウム種は 130 年間以上にわたり、知られている。その種は暗緑色で、時々殆ど青黒い植物で、多くの背の低い稜 (通常、10 個) と数多い、細い弱い刺を持つ。各刺座に 8 本まで。ちっぽけな花は一般的に淡い黄色である。しかしながら、ピンクの花を着ける形態も稀ではない。**G.hyptiacanthum** は栽培品の中に、このように長い間存在していたので、今日見られる幾つかの個体は恐らく、交配種起源であるだろう。栽培は非常にたやすい植物で、小さくてもすぐに花が咲く。変種 **citriflorum** と **eleutheracanthum** が、これまで命名されてきた。自生地：ウルグアイ……

1982 年、ドイツのカクタス雑誌 *KuaS* で H.Schlosser 氏と B.Schütz 博士が、詳細なウルグアイ産ギムノカリキウムの報告を行っています。彼らは、ウルグアイ産の **Macrosemineum**(本文中では、**Gymnocalycium**) が大きく分けると、以下の 3 つの形態集合に分割出来るとしています。

●**Gymnocalycium uruguayense**, **G.artigas** と **G.guerkeanum** を含む

●**Gymnocalycium hyptiacanthum**, **G.netrelianum** を含む

●**Gymnocalycium schroederianum**

そして、**G.schroederianum** の例外を除くと、**G.uruguayense** と **G.hyptiacanthum** は、全て非常に似ているように見えるとし、以下のように書いています。

……それは、背が低く、扁平な、刺座あたり 3 本から 11 本の縁刺を持つ胴体である。極めて稀に、散発的に 1 本の中刺が発達する。植物は全て、黄色い花が咲く。その際、種々の段階が出現する。ただ例外的にバラ色の花も、あるいは白い花も見つかる。確かに、全ての花の場合、常に 2 つの生殖器が造られているけれども、しかし、しばしば、雄蕊あるいは柱頭が萎縮している。その結果、人は雄性花と雌性花に区別できる。それ故、つまり、いわゆる不完全な雌雄異株が問題になっている。

(Porsch 氏、1938 年) けれども、そのような個体以外に、同じ生息地で、しばしば、明白な雌雄同株の個体例も見つかる。……

彼らは、**G.uruguayense** の形態集合では、**G.artigas** に関しては、Herter 氏が、最初の **G.artigas** の学術記載の挿絵で **G.uruguayense** を載せていることなどを根拠に、**G.uruguayense** の異名同種であるとしています。また、**G.guerkeanum** については、間違っってボリビアに由来するとして学術記載されたもので、この植物も **G.uruguayense** に属するという、F.Ritter 氏の見解を支持しています。

G.hyptiacanthum の形態集合では、**G.netrelianum** や **G.citriflorum** n. n を異名同種としていますが、**G.hyptiacanthum** と **G.leanum** については、次のように記述しています。

……主として、国 (ウルグアイ) の南に、背の低い、小さなコブ隆起の在る稜と 7 本から 9 本あるいは 11 本の縁刺をもつ多数の植物が存在する。非常に稀に、1 本の短い中刺が出現する。この植物全ては **G.hyptiacanthum** の形態集合に所属する。……中略……“全ての刺は細い、しかしかなり、

硬直している。胴体に向って曲がり、黄金色、根元と先端は暗い赤紫色。” そのような刺は、例外なくウルグアイ産の植物でのみ見つかる。しかし、この植物は又、極めて変化に富んでいる。まさに様々な形態が並んですぐに見つかる。刺の数は7本、9本あるいは11本の間で変動する。けれども、たった5本の剛毛形状の刺を持つ突然変異体も又存在する。同様に、刺の色も赤い基部と。赤い先端を持つか、あるいは全く無い、黄金色から灰白色まで変化する。大きな形態の豊かさにより惹き起こされて、当該文献中で、大きな混乱が支配した。そのため、Schumann 氏も **G.hyptiacanthum** と **G.leanum** とを統合してしまった。けれども、この種(**G.leanum**)は非常に疑わしいと見なければならぬ、何故なら、それはアルゼンチンに由来する種子から育てられたから。Backeberg 氏は **G.leanum** を最初は交配種と思った、後に彼は、その種は **G.netrelianum** と同一であると説明した。

Field 番号情報に基づき、**G.uruguayense** 集合体の分布地図を作成しました。ウルグアイ南部とア



地図 1 : **G.uruguayense** 集合体の分布地図

ルゼンチン国境周辺に **G.hyptiacanthum** や **G.leanum** とされた **G.uruguayense** 集合体が目立ちますが、コレクターの判断により、見解の違いがあり、Hofacker 氏ら言うように、**G.uruguayense** 集合体に関しては、含まれる種を明確に区別するのが困難であることが、分布地図からも想像されます。(地図 1 参照)

2. アルゼンチン産の **G.hyptiacanthum** と **G.leanum**

原学術記載の **G.hyptiacanthum** と **G.leanum** がアルゼンチン産であるとした詳細な記述は、オーストリア・ギムノカリキウム研究グループ(AGG)の W.Papsh 氏によって行われました。彼は雑誌 *Gymnocalycium* 12(3) 2000 の中で、原記載の分類学種 **G.leanum** は **G.reductum** (Link) Pfeiffer ex Mittler に対し強い形態学的類似性を示し、その亜種【 **G.reductum subsp. leeanum** (Hooker) Papsch 】であるとして学術記載をしました。



写真 6 : 原記載の **E.leanus** *Botanical Magazine* 1845 コピー

一方、**G.hyptiacanthum** については、雑誌 *Gymnocalycium* 14(1) 2001 の中で、原記載の種は、ブエノスアイレス地方の Sierras Bayas 山脈からの植物個体であり、**G.hyptiacanthum** (Lem.) Britton & Rose として、新模式種 (Neotypus) 【 *Cactearum Genera Nova Supecisque Novae* 21-22(1839) 】を提案しています。

種子グループ **Macrosemineum** に属し、ウルグアイからの黄花ギムノカリキウム種は長い間 **G.leanum** とも呼ばれていましたが、この間違いは Britton & Rose 両氏の誤った見解から生じたとされています。J.Shafer 氏により Salto(ウルグアイ)で発見された植物を、刺の出方の僅かな一致(特に実生苗の場合目立つ)と花色の間違った解釈、および後に付け加えられた発見地の申告から **G.leanum** と誤認したとされています。この間違いは、D.Metzing 博士が、1991 年にドイツで行われたギムノカリキウム会議の際に、この誤った解釈を話題にしたとされています。

W.Papsh 氏は、雑誌 *Gymnocalycium* の中で **G.leanum** について以下のように記述しています。

…ブエノスアイレスの南、Tandil と Mar del Plata の間にあるパンパ地方の山岳地帯と丘陵地帯に一つのギムノカリキウム種を見つけることができた。それは **G.leanum** (Hooker) Britton & Rose と同定される。典型的な個体例は分布地域の北の部分、Sierra del Tandil で見つかる、そしてあらゆる点で Hooker 氏の学術記載と合致する。最初の学術記載の際の挿絵に 2 枚の刺座のスケッチがある。それにより、暗い赤茶色

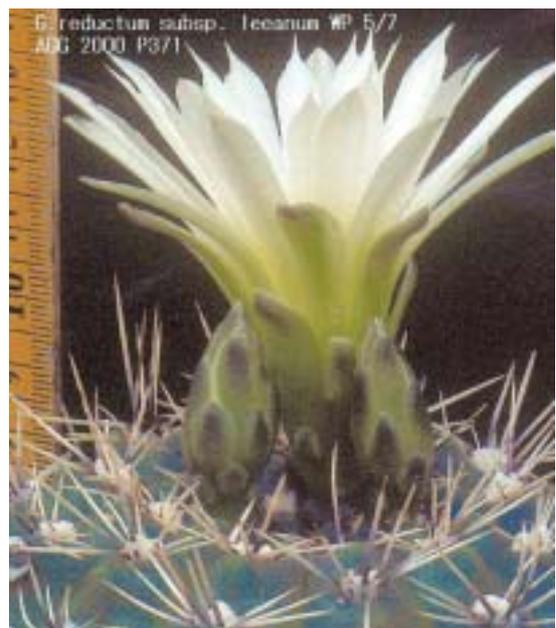


写真 7 : 雑誌 *Gymnocalycium* に W.Papsh 氏が学術記載した **G.reductum ssp. leeanum** WP 5/7 AGG 誌コピー

の基部を持つ明るい刺の配列が良く判別できる。この特徴および同じく Hooker 氏の挿絵にあるはつきりと認識できる花の特徴は Tandil 産の個体に特有である。

Balcarce 周辺では個体はよりくらい箒ブラシ形状の刺を出す。この型は **G.schatzlianum** *Strigl &*



写真 8 : Uhlig より **G.sp.n.** DV55/2 として
入った **G.schatzlianum**= **G.reductum** ssp.
leanum v. **schatzlianum** 筆者栽培・撮影

W.Till として学術記載されている。Sierra Bachicha と Sierra Barosa の狭い境界地域から更に Sierra Vigliancia と Sierra Peregrina を越えて更に南に発見地は延びている。より開放的で、より変化に富む刺の出方だけで、この分類学種から離れて独立した種として取り扱うことは不十分である。

形態学的相違は生態系依存型における相違を超えているので、これらの個体は **G.leanum** の変種として定められる。Balcarce の南部では個体は再びより色鮮やかで、より扁平球形状になり、Mar del Plata の型で美しさが最大に達する。

G.schatzlianum に対し大きな孤立した隙間が存在しないことや生態系での典型的変種の形態的相違に合致しているのでここでは、それらは分類学的にある種の下の亜種として組み込む事無しに、

ただ地域的な型として見なされる。【 **G.reductum** subsp. **leanum** v. **schatzlianum** (*Strigl & W.Till*) *Papsch*] ……

G.hyptiacanthum については、アルゼンチン・ダーウイン研究所の R.Kiesling 博士が 1987 年 *Cactus & Succulent Journal* (US) Vol.59 No.2 で学術記載した、**G.schroederianum** ssp. **bayense** *Kiesling* の異名同種であり次のように書いています。

…**G.schroederianum** (和名 ; 須黒玉) とその亜種(ssp. **bayense**)の学術記載は、**E.platense** の学術記載に対してごく僅かの相違しか示さない。比較する特徴において、**E.hyptiacanthus** の最初の学術記載も異なる側面は見つけることは出来ない。**E.hyptiacanthus** として学術描写された特徴は **G.platense** (*Spegazzini*) *Britton & Rose* と **G.schroederianum** ssp. **bayense** *Kiesling* のそれとは相関があるので、これらの分類種は一つの種として見なされる。そのため、最も古く使用された名前は **G.hyptiacanthum** (*Lem.*) *Britton & Rose* である。この種の全分布地域はブエノスアイレスの地方の幾分中心部に存在する。

G.schroederianum *Osten* とその亜種 **G.schroederianum** ssp. **paucicostatum** *Kiesling* も



写真 9 : **G.schroederianum** ssp. **bayense**
WP112-149 = **G.hyptiacanthum** sensu
W.papsch 谷山幸氏栽培・撮影

同様にこの型の環の中にあると理解される。それ故、**G.hyptiacanthum** の亜種【**G.hyptiacanthum ssp. schroederianum** (*Osten*)*Papsch*、**G.hyptiacanthum ssp. paucicostatum** (*Kiesling*) *Papsch*】とされる。それらは分布地域を Entre Rios と Corrientes 地方、及び河を越えたウルグアイにも持っている。そして **G.hyptiacanthum ssp. hyptiacanthum** に対して強く縦に伸びた子房を持つ花が咲く。……



写真 10 : **G. schroederianum** H042
Uhlig Plant = **G.hyptiacanthum ssp. schroederianum** sensu *W.papsch*
筆者栽培・撮影

V. Schaedlich 氏のホームページ <http://www.gymnos.de/> に **G.hyptiacanthum** の写真 (**G.hyptiacanthum** WP 89-059/073) が掲載されていますが、この種は、*W.Papsh* 氏により、当初 **G.hyptiacanthum v. mardelplatense** n.n. とされましたが、彼により **G.reductum subsp. leeanum v. schatzlianum** の異名同種とされていて、研究者に意見が異なるように思います。(写真 11 参照)

Backeberg 氏により、単なる名前に過ぎないと評価された伊藤芳夫氏が学名をつけた **G.gibbosum v. hyptiacanthum** (*Frié*) *Y.Ito* (和名 ; 竜冠、曲刺九紋竜) は、ここで言う *W.papsh* による **G.hyptiacanthum** か、V. Schaedlich 氏が考えているものかは、どちらかは不明ですが、伊藤氏の解説では、中刺が鉤状との記載があります。現在、日本でその名前で流通しているものは、**G.gibbosum** と **G.reductum** の間における、学名の混乱から派生した園芸雑種であると私は考えています。

D.Hunt 博士は、彼の最近の著書 *The New Cactus Lexicon 2006* で、**G.hyptiacanthum** については、議論された代表すべきでない名前、除くのが妥当としていて、*R.Kiesling* 博士が学術記載した、**G.schroederianum ssp. bayense** を有効としています。また、**G. reductum ssp. leeanum** (*Hooker*)

W.Papsh を認め、その異名同種として **G. schatzlianum** *Strigl & W.Till* を上げています。さらに *R.Kiesling* 博士が **G. hyptiacanthum** であると主張している **G. uruguayense** 系のネオタイプは支持されないとしています。(Darwin 植物研究所のホームページでは、**G.uruguayense** と



写真 11 : **G.hyptiacanthum** WP59-73(左)、V.Schaedlich 氏 ホームページ **G.mardelplatense** WP59-73(右)、谷山宰氏栽培・撮影

G.hyptiacanthum の箇所にも、全く同じ図が、両方ともネオタイプとして載っていて不可解です。)

また、テーマからは少し外れますが、**G.platense**(和名 ; 光竜丸)については、前述した *G.Frank* 氏が *Cactus & Succulent Journal (U.S.)*, Vol. XLIX, 1977 に次のような記載があります。

……**G.platense**(和名；光竜丸)と呼ばれる、一つの形態もまた、節Ⅲに属する。しかしながら、今までの所、Spegazini氏がこの名前で、実際に意味していたものが何かを、言う事が極めて難しい事は述べておかねばならない。不幸な事に、彼は、この分類学種の絵を決して公表しなかった。しかも学術記載は、明確な定義づけにはあまりにも短い。その自生地として、彼は、ブエノス・アイレス州の南に在る、Sierra Ventana Curamalalや Tandilのような、山岳地域と述べている。これに関連し



地図 2：アルゼンチン産の **G.hyptiacanthum**、**G.leanum** 分布地図

て、ギムノカリキウム専門家の間で、“**Gymnocalycium platense** とは何か、そして **Gymnocalycium leptanthum** は何か”という疑問に関して長い間、議論が続いてきた事は述べておきたい。これらの種は、大抵、混合され、混同されて

きた。しかし、先に概観したように、**G.leptanthum**(和名；麗富玉)は良く定義されていて、区別できる種である。最近、W.Rausch氏により、再び自生地から採取された。一方、**G.platense**は依然として不明な形態である。……

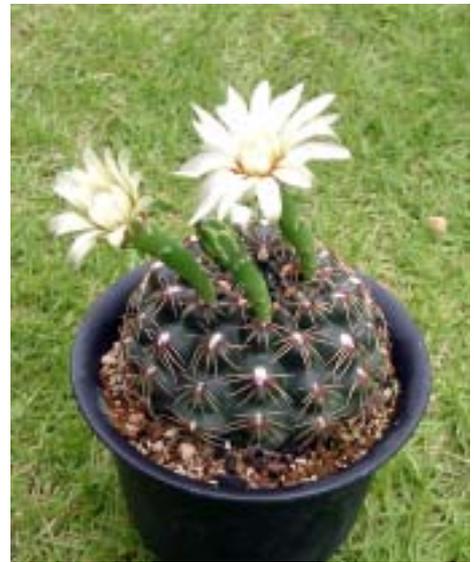


写真 12：**G.leptanthum** Mesa
種子 469.58 和名；光竜丸とされるタイプに近似。筆者栽培・撮影



写真 13：**G.leptanthum** 日本で標準的なタイプ 筆者栽培・撮影

産地から言えば、**G.platense** が W.Papsh 氏の言う **G.hyptiacanthum** と一致しますが、AGG の H.Till 氏らは、**G.leptanthum** に関する最近の記述(*Gymnocalycium* 20(3),2007)で **G.platense** のことに若干触れています。しかし、W.Papsh 氏のように明確に **G.hyptiacanthum** の異名同種とはしていませんので、**G.platense** は依然として不明な種かもしれません。

最近では、**G.platense**(和名；光竜丸)とされるものは、殆ど日本では見られませんが、過去にたくさん流通していたのは、**G.leptanthum**(和名；麗富玉)が起源の園芸品種の可能性が高いと私は考えています。**G.leptanthum**(和名；麗富玉)は、日本で流通しているタイプは変異がありませんが、最近の文献によれば、相当変異のある種類とされています。(写真 12,13 参照) また、日本でもポピュラーな **G.calochlorum**(和名；火星丸)は、H.Till と H.Amerhauser 両氏により、**G.leptanthum**(和名；麗富玉)の変種とすることが提案されています。

原記載に基づくアルゼンチン産の **G.hyptiacanthum**、**G.leanum** については、分類学者により、いろいろの考えがありますが、最近の Field 番号情報により、私が作成した種の分布図(地図 2)が参考になると思います。

終わりに

種子グループ **Macrosemineum** で **G.uruguayense** 集合体に属する **G.hyptiacanthum** (和名；雪冠玉)、**G.leanum** (和名；夕薫丸)に適用された学名は同定間違いとされ、原学術記載された **G.hyptiacanthum**、**G.leanum** はアルゼンチン南東部に、主に生息する種子グループ **Gymnocalycium** に属する種であることを紹介しました。しかし、原学術記載の種は、まだ研究者の中でも異論があり、結論が出ていないように思います。

本文を書くに当たり、写真を提供して頂いた谷山幸氏、V. Schaedlich 氏、ドイツ語翻訳文などの情報を提供して頂いた島田寿男氏に感謝致します。和名；雪冠玉については、**G.gibbosum**-**G.reductum** 系に付けられた名前かも知れないと言う、谷山氏の意見も合わせて紹介しておきます。

参考文献

- 伊藤芳夫(Y.Ito), サボテン図説, Explanatory Diagram of Austoroechinocactinae 1957
Curt Backeberg, Die Cactaceae BandIII, 1959
G.Frank, The Genus *Gymnocalycium* Cactus & Succulent Journal (US) Vol. XLVM, 1976, P215-218
G.Frank, The Genus *Gymnocalycium* Cactus & Succulent Journal (US) Vol. XLIX, 1977, P18-21
E.W.Putnam, *Gymnocalyciums* British Cactus and Succulent Society Handbook No. 5(1978)
H.Schlosser & B. Schütz, Die Gattung *Gymnocalycium* Pfeiffer in Uruguay
Kakteen und andere Sukkulenten 33(2), 1982, P26-29
H.Schlosser & B. Schütz, Die Gattung *Gymnocalycium* Pfeiffer in Uruguay 2
Kakteen und andere Sukkulenten 33(4), 1982, P88-91
R. Kiesling, *G.schroederianum* ssp. bayense, ssp. paucicostatum, Cactus & Succulent Journal (US) Vol.59 No.2, 1987
A.Hofacker & K.Herm, *G.uruguayense*, *Gymnocalycium* 7(4) 1994, XLXIII-XLXIV

A.Hofacker & K.Herm, *G.uruguayense*, *Gymnocalycium* 8(1) 1995, XLXVII-XLXIX
W. Papsch, *G.leanum* *Gymnocalycium* 12(3) 2000, P363-372
W. Papsch, *G.hyptiacanthum* *Gymnocalycium* 14(1) 2001, P385-392
David Hunt, Nigel Taylor, Graham Charles, *The New Cactus Lexicon* 2006
H.Till & H.Amerhauser, *G.leptanthum* *Gymnocalycium* 20(3) 2007, P725-732
R. Kiesling, Instituto de Botanica Darwinion 2008 Web Page
V. Schaedlich, *Gymnocalycium* 2008 Web Page